

雪の上の足跡

高原の古駅における、二月の夕方の対話

堀辰雄

青空文庫

主 やあ、どこへ行つたかと思つたら、雪だらけになつて歸つて来たね。

学生 林の中を歩いて来ました。雑木林の中などは随分雪が深いのですね。どうかすると、腰のあたりまで雪の中に埋まつてしまいます。^{けだもの}獣の足跡が一めんについているので、そんな上なら大丈夫かとおもつて、足を踏みこむと、その下が藪^{やぶ}になつていたりして、飛んだ目に逢つたりしました。

主 君と、兎なんぞが一しよになるものかね。それに、もういくぶん春めいて来ているから、凍^{しみゆき}雪もゆるんで来ているのだらう。だが、そうやって雪の中が歩いてきたら、さぞ好い気もちだ

ろうなあ。

学生 ええ、実に愉快でした。歩きながら、立原道造さんの詩にも、こうやって林の中をひとりで歩きながら、深い雪の底に夏の日に咲いていた花がそのまま隠れているような気がしたり、蝶の飛んでいる幻を見たりするような詩があつたのを思い出しました。

主 立原は、僕がはじめてここで冬を越したとき、二月になつてからやって来た。あいにく僕が病気で寝こんでいたので、君のように、ひとりで林の中を雪だらけになって歩いて帰って来たっけ。そのときの詩だろう。もう七八年前になるかなあ。……どうだい、狐のやつの足跡はついていなかったかい？

学生 狐の足跡はとも分かりませんでした。どんなんだか、まだそれもよくは……。

主 そうだな、こう、まっすぐに、一本の点線を雪の面おもてにすうつと描いたような具合に、林のへりなどをよく縫い歩いているのだがね。兎のやつのは、そこいら中を無茶苦茶に跳びまわると見え、足跡も一めんに入りみだれているが、狐のやつのは、いつもこう一すじにすうつとついている。そしてそのまま林の奥せどにほそほそと消えていたり、どうかすると思いがけず農家の背戸せどのあたりまで近づいて来ていたりする。

学生 狐なぞがまだこのへんにうろついているのでしょうか？

主 いるらしい。このごろは冬になると、僕はからきし意気地いけじがなくなつて、ちつとも雪の中を歩かないが、二三年前にはそんな足跡をいくつも見たことがある。しかし、いたつて、もうたかの知れたもんだ。せいぜい農家の鶏を盗りとにくる位なものだろう。

学生 いつだかお書きになつていた、昔、武家に切り殺された、この宿しゆくの遊女の墓に夜ごとに訪れてくる老狐の話——なんでもその墓にひとりでひび罅が入つて、ちようど刀傷のように痛いたしく見えた、その傷のあたりをその狐が舐なめてやつていたとかいう話でしたね。——あれはこの村の話なのですか？

主 この村ではないが、隣りの村の古老にきいた話だ。ハアンでも好んで書きそうな話だ。ああいう話が残つていたら、もつと

聞きたいものだが、あまり無いようだね。どうもこういう古駅には一たいに昔話などが少ないのではないかね。維新前までは茶屋旅籠はたごがたてこみ、脇本陣だけでも遊女が百人からいたという、名高い宿しゆくのあとだもの。その日その日にちがった話を諸国の旅びとから聞くのに追われて、山奥なぞのつれづれな炉ばたで人にときどきふと思ひ出されては漸ようやく忘却から蘇よみがえらされて来たような、そういう昔話の残っていないのも当然だろうじゃあないか。

学生　　そうかも知れませんか。しかし、まだ二つや三つはそんな話もありそうな気がしますね。

主　　そう、ありそうな気もする。ところが、ありそうで無いんだ。なんにも無いくせに、そんな雰囲気だけはもっている——そ

こがまあ現在のこの村の一種の持味で、僕なんぞにはかえってびつたりしているのだろうと思う。こんなに荒廃して、それがそれなりになんとなく錆びて落ち着いてきている、そんなところからそういう一種の味が出ているのだろうね。だから、つまらないことまで、妙に生き生きとして感ぜられて来ることもある。僕がはじめはこの村に來た当時のことだが、或日、昔の屋敷跡らしい大きな石崖のうえに立つて、秋らしい日ざしを浴びながら、病みあがりらしくぼんやり蓼科山たてしなやまの方をながめていた。その晩、宿の主人がいうのに、そのときそうやって石崖のうえに立っていた僕の姿を遠くから見かけて、ふと子供のときに見た一匹の傷ついた鹿のことを思い出したそうだ。なんでも霜のひどく下りた朝のこ

とで、山のほうから追われて来たらしいその鹿は、丁度その石崖のところまで来ると、ちよいと背後をふりむいてから、其処をすうっと跳びおりて、下の畠のなかを湯川ゆがわのほうへ一散に逃げていった。そうしてその畠の真白な霜の上には、その鹿の傷ついた足の血が鮮やかに残っていたという話だ。……そんなことをきいてから、その石崖にかぎらず、この村のあちこちに残っている石崖のひとつひとつが、僕にはなんとなく意味ありげに思われて来てならなかった。まあ、そういった鹿の跳び越えていった石垣だとか、秋になると蔦つたかずらが真紅になったまま捲きついている、何か悽せい慘さんな感じの、遊女らしい小さな墓だとか、——そういうものなら、そのほかに、まだまだ何かありそうだね、これという

話らしい話がそれに伴っていないなくとも。

学生 三好さんの詩にも、何処かの山村を、一匹の傷ついた鹿が足を縛られたまま、猟師にかつがれてゆく詩がありますね。あれは何処かしら？

主 伊豆の湯ヶ島あたりの風景だろう。僕は残念だが、とうとう鹿は見られなかった。向うの小瀬こせあたりでも、一昔前までは、よく鹿の啼なきごえが聞えたそうだ。

学生 僕はこの間、チェホフの「学生」という短篇をよみました。復活祭で帰省していた一人の学生が、或日——北風の吹いている、寒い日でしたが、なんだか此の世にはいつの時代にもこんな風が吹きまくっていて、そこには無智と悲惨としか見られない

ような考えを抱いて、非常にうち沈んだ気もちになって、散歩から帰つて来ると、もう暮れがたで、隣り村の或農家の中庭では焚^た火^{きび}をしている。みると、それは昔自分の乳母だった寡婦と、その不しあわせな娘なので、学生はしばらくその焚火にあたらしてもらっているうち、急に使徒のペテロも丁度こんな風に焚火にあたっていたんだらう、と思い出し、それからペテロが鶏の啼くまえに三たびクリストを否^{いな}んだ物語をその二人の女に向つて話しはじめ。女たちは黙つて聞いていたが、そのうち急に二人とも泣き出してしまふ。学生はそこを立ち去りながら、なぜ彼女たちは泣いたのだらうかと考える。別に自分がその話を感動的に話したか
らではない。それはきつとその話のペテロに起つた出来事が、彼

女たちにも、又、自分にもいくら関係しているからなんだろう。とおもうと、そんな昔から今日まで、断絶せずが続いている一つの鎖が見えるような気がしている。自分がその一方の端に触れたので、もう一方の端が揺れたのだ。真理と美とがあの大司祭の庭のなかで人びとを導いた、そうしていまもなおそれが我々を導いている。そう考えると、学生には急に自分に青春と幸福の感じが帰ってきて、人生が何か崇高な意味に充ちみちているように思われて来る。——そういった筋の、五六頁ばかりの短篇なのです。しかし、僕はそれを読んで、なんだかその学生と一しよになって泣きたいほど、感動しました。

主　ふむ、いい短篇だね。僕は読みそこなっていたが、いつか

その本を貸してくれたまえ。しかし、君の話だけでも、大体は分かるね。ちよつと其処にある聖書をとつてくれないか。そのところを読んでみよう。ルカ伝だったね。（聖書をひらいて読む）

「……やがて鶏鳴きぬ。主、ふりかえりてペテロに目をとめ給う。

ここにペテロ、主の「今日にわとり鳴く前に、なんじ三度みたびわれをいな否まん」と言い給いし御言みことばを憶おもいだし、外に出でて甚いたく泣けり

。」——鶏が鳴くと、遠くからイエスが焚火たきびにあたつているペテロの方をふりむいて見る、するとペテロは急にイエスに言われた言葉を思い出し、はつと我に返つて、庭の外へ出ていつて、暗がりのなかではげしく泣き出すのだね。チエホフの短篇の話をきいて、こここのところを読むと、なんだかこう一層、そのときのペテ

口の慟^{どうこく}哭が身ぢかに感ぜられて来るようだな。

学生 僕はこの短篇を読んだときにも思ったのですけれど、このペテロの話にしろ、いつかお書きになっていたエマオの旅びとの話にしろ、そんな縁遠いような物語がおもいがけず僕らの身ぢかに迫って来て、妙に感動させられることがあるのですが、それに反して日本の古い物語はいかに美しく、なつかしいと思つても、それだけの強い力がないような気がするのです。何か *une* なものの前にわれわれを無気力にさせてしまいます。そのチェホフの短篇は、まず、森のなかのもの寂しい自然の描写ではじまっています。チェホフの筆だと其処が非常に美しいんですが、そういうもの寂しい自然がすっかりその学生の心をめいらせているのです。

——そんなものからチエホフは小説を書きはじめていますが、日本のいいものはそれとは反対に、一番最後にそういうところへわれわれを引きずり込んでゆくように思われるんですけれど……。

主　確かにそういうところがあるだろう。これから君たちは大いにそういう fatal なものと戦ってみるのだね。僕なんぞも僕なりにには戦ってきたつもりだ。だんだんそういう fatal なものに一種の詮めあきらにちかい気もちも持ち出しているにはいるが。しかし、まだまだ躓もがけるだけ躓がいてみるよ。……（ばあつと夕日があたつて来だしたのを見て、窓をあける。）毎日、こうして雪のなかの落日を眺めるのが愉たのしみだ。なんだか一日じゆう、冬の日ざしが明る過ぎて、室内にいても雪の反射でまぶしくって本も読め

ずに、ぼやぼやしながらその日も終ろうとする、——そんな空ろな気もちでいるときでも、この雪の野を赤あかと赫かがやかせながら山のかなたに落ちてゆこうとしている日を眺めると、急に身も心もしまるような気がするのだ。君はいま、こういう落日をみなながら、どんな文学的感情を喚よび起おこすかね？

学生　そうですね。僕には、いま、二つのものが浮びます。一つは釈迢空の「死者の書」を莊巖にいろどっていたあの落日の美しさです。それからもう一つは、フランシス・トムスンが「落日頌」(Ode to the setting sun)の中で歌った、あの野なかの十字架のうえを血で染めたように赫やかせながら没してゆく太陽の神々しさです。——向うの山の端に、いま、くるめき入ろうとしてい

るあの太陽は、「死者の書」に描かれてある、ああいった山越しの阿弥陀像あみだぞうめいても感ぜられ、それにもしいんとするような美しさを感じますが、それは何んといつても、やはり僕は、この雪の野のなかに、太陽の最後の光をあびて血に染まったようになって悲痛に立っている一本の十字架を求めたいような気がします。

主 釈迦空と、フランシス・トムスンか。なかなか重厚な好みだな。……僕はきのうね、こんな落日を眺めながら、ふいと飛驒ひだの山のなかの或る落日をおもい浮かべていた。もちろん、想像そうぞう裡りのものだがね。——「鷺の巢の楠の枯枝に日は入りぬ」どうだ、凄い image だろう。凡兆の句だよ。「越こしより飛驒へ行くとして籠かごの渡りのあやふきところと道もなき山路にさまよひて」と

いう前書がある。そんな山のなかで、鷲の巣らしいものがかかっている、大きな楠の枯れ枯れになった枝を透いて日が真赤になってくるめき入る光景だろう。鷲の巣は見たことがない、しかし、楠の老木は嘗^かつて見たことがある。上信国境にある牧場のまんなかに、その大木がぽつんと一本だけ立っていた。その孤独な姿がいかにも印象的だった。そういう記憶があるせいか、この凡兆の句にある楠も、僕には、そんな山のなかに他の木^こむらからも離れて、ぽつんと一本だけ立っている老木のような気がする。

学生（目をつぶりながら）「鷲の巣の楠の枯枝に日は入りぬ」
—— 凄いなあ。

主 そんな句がみごとに浮ぶこともある。かとおもうと、随分

くだらないことを思い出して、いつまでもひとりで感傷的な気分になつてゐることもある。或日などは、昔、村の雜貨店で買った十銭の雜記帳の表紙の絵をおもい浮べていた。雪のなかに半ば埋もれて夕日を浴びている一軒の山小屋と、その向うの夕焼けのした森と、それからわが家に帰つてゆく主人と犬と、——まあ、そういういた絵はがきじみた紋切型の絵だ。或日、その雜記帳を買つてきて僕がなんとということもなくその表紙の絵をスウイスあたり冬の景色だろう位におもつて見ていたら、宿の主人がそばから見て、それは軽井沢の絵ですね、とすこしも疑わずに言うので、しまいには僕まで、これはひよつとしたら軽井沢の何処かに、冬になつて、すっかり雪に埋まつてしまうと、これとそっくりな風景

がひとりでに出来あがるのかも、と思ひ出したものだ。そうしたら急に、こんな絵はがきのような山小屋で、一冬、犬でも飼うて、暮らしたくなつた。その夢はそれからやつと二三年立つて実現された。——その冬は、おもいがけず悲しい思ひ出になつたが、それはともかくも、あの頃の——立原などもまだ生きていて一しよに遊んでいた頃の僕たちときたら、まだ若々しく、そんな他愛のない夢にも自分の一生を賭けるかようなことまでしかなかつた。まあ、そういう時代のかたみのようなものだが、——その十銭の雑記帳の表紙の絵を、僕はこういう落日を前にして、しみじみと思ひ浮べているようなこともあるしね。……だが、きようは、君のおかげで、枯木林のなかの落日の光景がうかぶ。雪

の面には木々の影がいくすじとなく異様に長ながと横わっている。^{おもて}
それがこころもち紫がかっている。どこかで頬白がかすかに啼^なき
ながら枝移りしている。聞えるものはたったそれだけ。(そのま
ま目をつぶる。)そのあたりには兎やら雉^{きじ}子やらのみだれた足跡
がついている。そうしてそんな中に雑^まじって、一すじだけ、誰か
の足跡が幽^{かす}かについている。それは僕自身のだか、立原のだか：
…。

学生 急に寒くなってきましたね。もう窓をしめましようか。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第6巻」小学館

1988（昭和63）年6月1日初版第1刷発行

底本の親本：「堀辰雄全集 第3巻」筑摩書房

1977（昭和52）年11月30日初版第1刷発行

初出：「新潮」

1946（昭和21）年3月号

初収単行本：「堀辰雄作品集第六・花を持てる女」角川書店

1948（昭和23）年4月1日

※筑摩書房の全集版の底本は角川書店版による。

※初出情報は、「堀辰雄全集 第3巻」筑摩書房、1977（昭和52）年11月30日、解題による。

入力：kompass

校正：門田裕志

2004年1月21日作成

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の上の足跡

高原の古駅における、二月の夕方の対話

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 堀辰雄

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>